

長崎の鐘

長崎の鐘

永井 隆

日比谷出版社

長崎の鐘

昭和二十四年四月五日 印刷
昭和二十四年四月十日 發行

定價 二〇〇圓

著者 永井 隆

發行者 式場 俊三

印刷者 星野 忠作
東京都港區芝濱松町一丁目十三

印刷所 スター印刷株式會社
東京都港區芝松濱町一丁目十三

發行所 日比谷出版社
東京都港區芝今入町八

永井博士のために

式場隆三郎

昭和二十三年度のわが國の出版界の記録の中に、永井隆博士の諸著作が大きな地位をしめたことは、だれも異存のないところであらう。永井氏はいま日本中に多くの愛讀者をもち、理解者をもつてゐる。そして外國からの反響さへあらはれつゝある。永井氏を世におくつた責任者は、私である。その経過の概要は「生命の河」の序文に書いた。終戦直後に原子病のために倒れた永井氏に、その体験記をのこすことをすゝめたのは熊倉一夫氏であつた。原爆で妻を失ひ、自らも餘命いくばくもないことを知つた永井氏は、原子病學者としての遺書のやうな氣持でペンをとり、書きあげたのがこの「長崎の鐘」であつた。初めは「原子時代の開幕」と題してあつた。その勞作は九州で發表することができなくて東京へおくられて熊倉氏の友人である山本俊夫氏に托された。しかし、山本氏の努力にもかゝはらずその原稿を引受ける出版社がな

かつた。そこで山本氏が私のところへもつて來られたのであつた。私は一讀して心うたれ、出版を引受けた。そして永井氏に書をよせて、この稀有の文献が必ずや世に認められる日のあることを知らせ、出版の勞を私がとることを契つた。その後「原子病患者の手記」と題する短文を書いてもらつて、私の主宰する東京タイムズに連載した。果して、大きな反響があつた。

一方私は同志とともに、その勞作の刊行に着手した。しかし、心ある人の知ることく、原子問題はいまや世界の重大事であつて、戦争責任者としての日本人がそれについて物をいふことを慎まねばならない状態にある。

私は永井氏の勞作を吉田首相の令息である吉田健一君に英譯してもらひ、諸外國の人々にも讀んでもらつた。そして慎重な準備のもとに、この書の世に出る日を待つた。いま關係當局の理解のもとにやうやく刊行することができて、著者とともに深いよるこびを感じる。附録につけたマニラの悲劇のドキュメントは、軍政部の提供になるものである。私たちは長崎の悲劇に顔をさげるとともに、マニラの事件についても深い反省をもたねばならぬ。永井氏の記録は世界最初の原爆体験記として、世界中の人々から注目されるであらうし、必ず後世にのこる名著

である。そして、われわれ日本人はそれとともにマニラ事件を嚴肅な氣持で讀まねばならぬ。私は永井氏の勞作の刊行の實現に、三年の歳月をかけた。死の床にある永井氏の病症の惡化を知つたときは、せめて生前にこの書を枕もとにとどけてやりたい、とあせつたこともある。しかし、この重大な文獻は個人的の感情で動いたら永久に失はれる危険のあることを自覺して、時の來るのを待つたのである。私は永井氏の生きてゐられるうちに、この本が世に出たことを神に感謝する。

「ロザリオの鎖」は、處女作ともよぶべきこの「長崎の鐘」が出るのを病床で待ちわびる永井氏を慰めるために、私が書いてもらつた斷章であつた。そしてつゞいて書かれたのが「この子を残して」であり、自傳小説体の「亡びぬものを」（長崎日日新聞社刊）である。「生命の河」は永井氏が「長崎の鐘」とともに原子病學者としてどうしても書き残したいと念じて、病症の重くなるのを覺悟して書きあげた勞作である。「ロザリオの鎖」や「この子を残して」は人間永井氏の美しい魂の表現であつて、多くの人々の胸を打つた。しかし「長崎の鐘」はもつと高い、もつと深いものをもつてゐる。ジョン・ハーシーの「ヒロシマ」は、原爆最初の記録文獻

として世界中に讀者をえた名作である。だが永井氏の「長崎の鐘」は、日本人の立場から書いた最初のものとして「ヒロシマ」とともに不滅の價值をもつてゐる。私はつゞいてこの書の英譯版がアメリカで刊行されるやうに努力するつもりである。

十一月一日の午後、私は長崎へ行つて永井氏の病床を見舞ひ、その勞作「生命の河」の出版を祝つた。この夏重態におちいつた時、カトリックの信者たちにかこまれて最後のいとなみまですされたとき永井氏も、また元氣をとりもどして「長崎の鐘」の出るまでは生きてゐたいといはれた。それほど待ちつゞけられるこの處女作が、かうして世に出ることができたのである。私はここまで書いてきて胸がせまつて、涙で眼がかすむ。この感動はおそらく著者と私だけが味はへるひそかなものかもしれない。この本ができたなら、私はまた長崎へとんで行つて、永井氏と手をにぎりあつて泣かう。

さて、永井氏の人となりについては、もう知つてゐる方々が多いと思ふが、初めての方のためにもう一度紹介の勞をとらう。明治四十一年松江市苧町田野病院で生れ、幼年時代を父の開業してゐられた鳥取縣飯石郡飯石村でおくり、その小學校を卒へて松江中學へ入學、大正十

四年に卒業し松江高等學校へ入り、昭和三年に卒業して長崎醫大へ入り、昭和七年に卒業した。そして同大學の物理療法科の助手となり研究生活へ入つた。昭和九年にカトリック教の洗禮をうけて信仰生活へ入られた。その年に結婚し、十二年に長崎醫大講師となり、十五年に助教授となつた。醫學博士の學位をうけたのは、十九年の三月で三十九才の春であつた。放射線の研究と治療のために原子病にかゝつてゐるうちに長崎の原子爆彈をうけ、奥さんは亡くなり、自らもその被害のために重症におちいつて病床についてしまつた。昭和二十一年一月教授となつたが、もはや教壇にたてなくなつたので、今年休職となつた、現在の家族には十四才の誠一君と八才の茅乃さんがゐる。二疊一間の小さな病舎をカトリックの信者たちからおくられてゐるが、二人の子供さんたちは近くの弟さんがみてくれてゐる。

くトさんはいま深い信仰の中にあつて、心靜かに横はつてゐる。もう死の恐怖をこえた心境がみえる。『心は一日も長く生きてもらひ、一篇でもよけいに書き残してもらひたいと念じてゐる。

はるゝに長崎の浦上の天主堂のほとりにある永井さんを想ひつゝ、つひに世に出る「長崎の鐘」を出版したい。

昭和二十三年十二月十八日あさ

自序

原子爆弾について知りたいとだれも思っています。その場に居合わせていた私は、見たこと聞いたこと調べたこと感じたことをそのまま知らせたいと思いました。そしてこの本を書きました。それはあの日の傷がなおつて、ほろたいをとつたばかりの病床での仕事でした。今になつて読み直してみると、手ばかりだらけの不完全な記録ですが、しかし今になつてはこれだけ生々しい印象を興えるものは、私に書けますまい。自分が書いたものながら、讀めば身震いします。これは醫者の立場から見たものです。しかし醫學的に記録されてあるとは申されませぬ。現場のスケッチもなく、傷の寫眞もなく、解剖したこともなく、標本もとつてありません。これでは醫學論文としての價值はないわけでしょう。しかしあの際手當をしたり片附けたりした死傷者が顔見知りの學生や町内の人々であつては、冷い科學者として知識欲一本で取りあつか

うことは如何にしても出来ず、結局は情に負ける市民であつた私なのです。

だからこの本は科學的記録でもなく、さりとてまた文學的報告でもありません。しかし一つの人間的手記であるとは云えましょう。

このごろ私の書いた本が幾冊か出版されましたが、實を云うと、この本の原稿こそ私が最初に筆を執つたものなのです。そして私の原子ものシリーズの主著をなすものです。けれども後の鳥が先になつたように他の本が先に世に出てしまいました。それと云うのもこの原稿は出版界にはずぶの素人が古今東西未曾有の大事件を書いたので、その内容なり文体なりが新奇異常を極めていまして、どこの出版社でも引受けてくれなかつたからです。原稿の世話をして下さつた熊倉一夫さんの努力にもかかわらず、どうやら陽の目を見ずに流産してしまいそうになりました。たとい拙いものであつても、有りのままを正直に描寫した實相記録なのだから、わずかの部數でもいい、出版してもらえたら、この人類史上の大事件の生きた記録を世に残すことが出来て、後世何かの役に立つものを……と嘆いていたような次第でした。熊倉さんはこの原稿を抱いて長い間走りまわつて下さいました。とうとう最後にこの原稿を拾い上げて下さる人

に出會いました。山本俊夫さんを通じて紹介された式場隆三郎博士がその人だったのです。

どこの出版社でも、こんな一風變つた文章はお断りですと突返した原稿を式場博士がなぜ引受けて出版のため努めて下さつたのかは推量するだけで確かなことは判りませんが、結局それは深い友愛から出たものではあるまいかと私は思います。それと云うのは、何しろ途方もない恐るべき文章であつて、文壇人の作品と異つているため、すらすらと印刷へまわすわけにゆかなかつたものを博士は令弟の式場俊三さんを始め、香西昇さんや松本國雄さん等日比谷出版社の方々と力を協せ、あらゆる手を打つて、とうとう出版までこぎつけて下さつた、その心遣いと体の疲れとが全く利害を離れての眞剣なものであつたことで判ります。しかも忙しい中に二度までも長崎の私のもとを訪れ、慰め勵まして下さつた。東京から長崎へ、それまで未知であつた私を見舞にゆく――これは友愛としか考えられないではありませんか。式場博士はそれからのちあちこちの雑誌社や新聞社に紹介し、ずぶの素人の私を出版界の新顔に引立てて下さいました。そのおかげで、今では筆をもつて復興のために働くことが出来るようになりました。

この本の目的は、原子爆彈の實相をひろく知らせ、人々に戦争をきらい平和を守る心を起さ

せるにあります。その点から考えて、占領軍の方からマニラの記録を頂いて合本にして出すようになったことは大變良い効果をあげるので、感謝に堪えない處です。

吉田さん、林さん等が英譯して下さいました。英文によつてひろく海外に私の「平和を守れ」の叫びが傳わると思うと、心に張りが出て参ります。

このように多くの友愛にたすけられながら私は、癡人になつてゐるにもかかわらず、筆を執つて働いています。ありがたい仕合せと申さねばなりません。

この本の題名となつた浦上天主堂の鐘は、あのクリスマスに煉瓦のくずれた中からつり出され、地面近くに仮吊りのまま鳴らされてきましたが、それから丸三年たつた今、新しい鐘樓が建ち、このクリスマスから中空高く鳴り出すようになりました。この平和の鐘が一日もかかず世々の末、世界の終りの日まで鳴り續きますよう祈り且つ努めたいものです。

昭和二十三年御降誕祭

長崎市浦上

著

者

長
崎
の
鐘

一、その直前

川越図書館

昭和二十年八月九日の太陽が、いつもの通り平凡に金比羅山から顔を出し、美しい浦上は、その最後の朝を迎えたのであつた。川沿いの平地を埋める各種兵器工場の煙突は白煙を吐き、街道をはさむ商店街のいらかは紫の浪とつらなり、丘の住宅地は家族のまどいを知らず朝餉の煙をあげ、山腹の段々畑はよく茂つた藎の上に露をかきやかせている。東洋一の天主堂では、白いペールをかむつた信者の群が、人の世の罪を懺悔していた。

長崎医科大学は今日も八時からきちんと講義を始めた。国民義勇軍の命令の、かつ戦いかつ学ぶという方針のもとに、どの学級も研究室も病舎も、それ

どれ専門の任務をもつた医療救護隊に改編され、防空服に身を固め、救護材料を腰につけた職員、学徒が、講義に、研究に、治療に従事しているのだつた。いざという時にはすぐさま配置について空襲傷者の收容に当ることになつており、事実これまでになん回もそうした経験がある。殊につい一週間まえ大学が被爆した時など、学生には三名の即死、十数名の負傷者を出したけれども、学生、看護婦の勇敢な活動によつて、入院外來患者には一人の犠牲者も出さなかつたほどである。この大学はもう戦^{いくさ}になれていた。

警戒警報が鳴りわたつた。病院の大廊下へ講堂から学生の群が流れだし、幾組かのかたまりになつてそれらの持場へ散つていつた。本部傳令がいちはやくメガホンで情報を叫びながら廊下を走り去つた。相変らず今日も南九州に大規模な空襲があるらしい。引きつゞいて空襲警報が鳴りだした。空を仰ぐと澄みきつた朝空にちかちか目を射る高層雲が光り、どうやら敵機^{てきき}の來そうな氣配